戯言教室

容疑者B

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

戯言遣いが哀川潤に連れてこられたのは、澄百合学園だの、箱庭学園でも、２４０学園でも無く、椚ヶ丘中学校だった。

「いーたん、教員免許持ってるよな？」

「何させる気ですか、哀川さん」

戯言遣いの戯言が今、暗殺教室の黄色（ターゲット）に牙をむくーーーいや、むかないけど。戯言だからね。

※暗殺教室と戯言シリーズのクロスです。どちらも既読であることをオススメしますが、どちらか読んでいなくても楽しいように書ければと思います。

目次

アンサツイエロー　戯言遣いと暗殺教室 ―― 1
アンサツイエロー　戯言遣いと暗殺教室 ―― 7
アンサツイエロー　戯言遣いと暗殺教室 ―― 13
アンサツイエロー　戯言遣いと暗殺教室 ―― 18
アンサツイエロー　戯言遣いと暗殺教室 ―― 22

アンサツイエロー　戯言遣いと暗殺教室

「おい、いーたん」
「なんですか？哀川さん」
　間髪入れずに答えた。どうやら哀川さんは、今は機嫌が悪いらしく、これまた間髪入れずに、僕の腹部に赤いヒールが刺さった。
「あたしのことを苗字で呼ぶな。苗字で呼ぶのは敵だけだ」
「げほっ…じ、潤さん。なんですか…いきなりこんな所に呼び出して…」
「あーそうそう、その件なんだけどよ。生憎と急ぎなもんで、悪ぃけど話は後だよ。とりあえず乗れ。そして着替えろ」
「着替えろってーー何にですか？」
　僕は、真っ赤なコブラに押し込まれつつ聴く。
「何ってーースーツだよ、スーツ。ほら、早く着替えろ」
「スーツ？いや、哀川さん。僕をどこに連れていく気なんです？」
　狭い車の中で苦闘しつつも、言われたとおりにスーツに着替えながら純粋な疑問を口に出す。哀川さんが何も言わずにめちゃくちゃなことをし出すのはもう何も言わないが、せめて何をする気なのかは教えて欲しい。スーツと言うなら、そこまで大変なーーー訳の分からないことでは無いだろう。ここでセーラー服でも渡されたらもう訳が分からなかったが。
　そこでーー、走り出した車が、いきなり初速とは思えないスピードで走り出した。体が完全に斜め４５度をとったーーーー車ごと。
「あたしのことを苗字で呼ぶな。苗字で呼ぶのは敵だけだ。何回言わせんだよいーたん」
「め、めちゃくちゃだ…本当に…」
　訂正。スーツだからといって訳のわかる話ではないかもしれない。なにせ本人自体が訳のわからない存在なのだから。
「いまから行くのは椚ヶ丘中学校だよ」
「椚ヶ丘？椚ヶ丘って、あの名門私立の、ですか？」
「お、さすがに知ってるか。なら話は早いな。いーたん、教員免許持っ

てんだろ？」
「持ってますけど…なんで知ってるんですか。そして何をさせるつもりなんですか」
嫌な予感がする――というか、嫌な予感しかしない。とはいえ、何時もの予感とは違う、単に酷い目に会いそうとか、その類の予感だ。誰かが死にそうとかではなく。
「着替えたか？」
「あ、はい。見ての通りですけれど、潤さん」
「おし、そんじゃあ――」
赤信号で車が止まる。すっと潤さんは後ろを…僕の方を向いて、何かを差し出した。
思わず差し出された何かを取ってしまう。
「えっと、これは――？」
「こっから長いからさ」
「はい？」
ちょっと寝てろ、という声とともに、物凄い電流が体に走る―――何が起きたか分からないまま、僕の意識は――眠りについた。

――――――――――――――――――――

「おい、起きろい―たん」
「いっっ…お、おはよう…ございます？」
哀川さんからの容赦ないチョップで目が覚めた。…いや、もう一度眠りそうになったのだが、それでも目は覚めた。…スタンガンを掴んでいた左手がかなり痛い…あと今しがた脳天も痛くなった。
「降りろ、着いたぞ」
「は…え？」
ぱっと窓の外を見ると――椚ヶ丘中学校。僕が気絶している間に、本当に連れてこられてしまったらしい。哀川潤は扉を開くと、僕を校門まで放り投げた。…強かに腰をぶつけた。
「詳しい話は理事長に聞けよ。あたしは忙しいんだ。あー、本当だっ

たらいーたんを女装させて済百合に連れてこうと思ってたんだけどなー、こっちが優先なんだよ、残念ながら。仕方ねえから、こっちには別のヤツ連れてくわ」
「え…ちょっと、聞き逃せない発言が聞こえたんですが…潤さん、説明してくれないんですか」
「だーかーら、あたしが説明するより本人に聞いた方が早いからそうしろっつってんの。こっちの件が終わったらすぐ助っ人連れていってやるから、とりあえず1ヶ月は働いてろ」
「は…え？あの」
「ほんじゃあなー、元気にやれよー」
僕の言うことを全て遮って、赤いコブラは無情にも走り去って行った。非道にも走り去って行った。
…今まで以上に状況が把握できない。しかし、中学校の校門の前で、スーツを着た大の大人がずっと立っている訳には流石に行かないだろう。言われた通りにするしかないか。
校門を開けて中に入る。携帯電話の時間によると、今は丁度六時。午前六時だ。僕みたいな立場のよくわからない大人が、理事長に会いに行くために学校に入るにはちょうど良い時間であって、それはこれ以上遅れると登校してくる生徒とダイレクトにはち会うという事と同義でもある。どちらにせよ、早く入らないといけないという事だ。
取り敢えず校内をうろついてみる。理事長なら理事長室だろう。なら最上階か？…それにしても、有名私立の進学校であるだけあって、とんでもなく綺麗だ。比較対象がおかしいかもしれないけれど、僕の住んでいる骨董アパートとは比べ物にならない。…いや、戯言だけど。
校内地図を見つけて、理事長室の扉を叩く。
「…どうぞ」
低い声。理事長という肩書きらしいといえばらしい声だ。なんて、極めて適当なことを考えながら、扉を開ける。
背の高い男が一人、正面の椅子に座っていた。口はにっこりと優しい風に笑っている、逆にーー冷たい目をした男だった。

「どうも、理事長さん…あっていますよね？」
「勿論、あっているとも。私は理事長の浅野學峯だ。君は、潤さんに頼んだ人材で合っているね？」
「…いえ、僕は確かに哀川さんに連れてこられた者ですけれど。僕は哀川さんから話をなにも聞いていません。何をするのか、まず教えて貰えませんか？」
「勿論。…君、名前は？」
「ああ、名前は…名乗らないようにしているんです。友人は僕のことをいーちゃんと読んでいて、哀川さんはいーたんとか…後は色々ありますけれど、戯言遣いと呼ぶ人も多いです。お好きに呼んでください」
「ふうん。あの哀川潤が寄越した人材だ。深く詮索はしない方がいいのかな…。では、戯言遣いとでも呼ぼうか。君にやってもらうのは、今言った通り教師だ」
　教師。いや、勿論分かってはいた。来る時に教員免許の有無を聞かれたのもそうだし、先程も理事長ーーー浅野學峯さんが言っていたのもある。そこまで伏線というのも馬鹿らしい、伏線とさえ言えないような伏線を乱雑に放り投げておいて、いまさら〝構内清掃をやって欲しい〟なんて言われるわけがない。それこそ戯言だ。
「教師ですか。先に言っておかせてもらいますが、僕に教師の経験はありません。いつか家庭教師のアルバイトくらいなら、まあすることもあるかもしれませんが、進学校の教師をやりきる自信なんてありませんが」
「ふむ、本当に何も聞いていないんだね？戯言遣い君。ならば、直接行ってみたほうが早いだろう」
　浅野さんは、僕が先程ここに来るために見ていた校内地図の縮小版を机からだし、赤の油性ペンで矢印を書いた。
「この道を真っ直ぐ行けば君の配属される教室だ。ああ、一応聞いておくけど、体力はある方かな？」
「体力…ですか。まあ、それなりという所でしょうかね…」
　すっと立ち上がり、僕が入ってきた扉を開く。

「そうか。いや何、体力が無いと言われたら少し困るからね。安心したよ。では、宜しく頼むよ、戯言遣いの先生」
もう出ていけ、という事だろう。僕としてはもう少し話を聞きたいところだが、流石にこの空気で出ていかないというほど、僕は空気の読めない男じゃなかったーーーー残念ながら。
外に出ると、ぱたんと扉が静かに閉められる。…この地図、ぱっと見山に向かえと書いてある気がするんだが、気の所為か？

ーーーーーーーーーーーーーーーー

校舎に着いた。…山頂だった。こんな所に校舎があるのも信じられないが、僕、まさか毎日ここ登るのか…？というか、よく考えたらどこに住んだらいいのだろうか。近くにホテルとかあったっけ…と思いつつ携帯電話を見ると、圏外だった。畜生…
「君が助っ人か？」
「？」
後ろから声をかけられる。ぱっと振り向くと、オールバックの背の高い男だった。
「人類最強の請負人に頼んだ助っ人だ。君で間違いないか？」
「ああ、はい。今日からここで教師をするーーらしいです。貴方は？」
「俺は烏間。烏間惟臣だ。防衛省に務めている」
「防衛省？ええと、ここの教師では無いんですか？」
「いいや、ここの教師というのに間違いはない。名前を聞いてもいいか？」
「…名前は答えないようにしています。いーたんいっくんいー兄いっきー戯言遣いエトセトラ。お好きに呼んでください」
「なんだ、それは…」
「ならいーたんって呼ばせてもらうわよ」
またもや背後から声がした。丁度挟み撃ちの構図になるな、と考えながら振り向くと、…類まれなる美女がいた。露出高め、高身長、金髪。
「あんたがヘルパー？私はイリーナ・イエラビッチよ。英語教員。宜

しくね？ボーイ」
「こちらこそ、よろしくお願いします。イエラビッチさん」
「…イリーナ、職員室で大人しくしておけと言ったはずだが？」
「な、なによ！新任の教師なんでしょ!?見に来たっていいじゃない」
「…あのタコは来ていないだろうな？」
「流石に止めたわ。まだ説明してないんでしょ？それとも暗殺者として来てるのかしら」
「は？暗殺者？」
「…説明していない、だから黙って職員室にいろ」
「なっ、私がお荷物だって言うわけ？ちょっ…押すんじゃないわよ！ちょっとー！」
…電光石火のごとく退場して行った。正確には烏間さんに押されて校舎に押し込まれて行った。
「…失礼した。改めて概要をお話させて頂く。着いてきてくれ」
「あ、はい」
烏間さんは僕に背を向けて先程イエラビッチさんを押し込んだ校舎へと入って行った。…珍しくまともな人と触れ合っている気がするな。教師といえど、もしかしたら割と簡単に済ませられるかもしれない。
なんて。来る時に感じた予感はまだ感じている。…こんなのは、ただの戯言だよな。

アンサツイエロー　戯言遣いと暗殺教室　2

「えー、ということで皆さん。先日律さんが仲間になったばかりですが、なんとなんと、今日は新しい先生をお迎えしました！」
　扉の向こうがその一言で湧き上がる。まるで転校生が来るかのような反応だ。…いや、大差ないのかな。暫く声がこちらに向くのを待つ。
「いー先生、どうぞ入ってください！」
　一通り話し終えたようで、廊下で待機していた僕に声が掛かる。というか、わざわざ廊下で待機する必要があるのだろうか。どこでもそうだけれど、やはりこういうイベントは演出を重視するのか。それとも、知らない間に見知った教室に知らない人間がいるという、見ようによったらーーー見ようによるまでもなくーーー怖いシチュエーションを避けるためだろうか。
　ガラリと扉をスライドして教室に這入る。先程までがらんどうだった教室の机に、当然といえば当然だが、きっちりと中学生が座っている。学生である僕からしたら、早々見れる景色ではないので、なかなかに壮観だ。
「…こんにちは。今日から皆さんと一緒に勉強するーーーいや、違うか。こういう場合、どういう自己紹介をするべきなんですかね？」
「ヌルフフフ、そうですねえ。普通は名前と趣味、最後に質問を、というのがオーソドックスなところですが、君の場合は特殊です。いきなり質問タイムに入っちゃってもいいんじゃないですかねぇ」
「そうでしょうか。ではそうします。何か質問があれば聞いてください。答えられれば答えます」
「えええぇぇ？なんだそれ…」
　…普通、学生は教師として教卓には立たない。自己紹介をしろと言われてもどうしようも無い。生徒の困惑の声が凄いが、僕にもどうすることも出来ない。文句なら哀川さんに言って欲しいものだ。僕も言いたい。
「はいはーい！じゃあ最初はこれでしょ！先生の名前はなんですかー

？」
　ふわふわした髪の女の子が勢いよく手を挙げた。
「…いきなりで悪いけど、その質問には答えられない」
「は？名前だぞ？なんでだよ」
「事情があってね。本名は人に教えないようにしてるんだ。いーちゃんいっくんいー兄いーたん戯言遣いエトセトラ…好きに呼んでくれ。因みに、先程あったイエラビッチさん…イエラビッチ先生はいーくんと読んでいる」
「なんだそりゃ…。苗字呼び名前呼びすっ飛ばしていきなりニックネーム呼びかよ…。」
「じゃー次俺！なんの教科をやってくれるんだ？」
　坊主頭の少年が手を上げる。
「それも…決まってない、というか知らない…あ、いや。好きな教科をやっていいと言われてる」
「なんだ、それ…じ、じゃあ先生、ええと」
　水色の髪の背の低い少年が言い淀む。
　やがてゆっくりと手を挙げた。
「先生は、どんな暗殺者…なんですか？」
「……いや。僕は暗殺者なんかじゃないよ」
「「……は？」」
　今日一番の困惑ーーというか、クラス全員、完璧な程にハモった。
ああ、ついでに隣の超生物もハモっていた。お前は把握しておけ。
「いやいやいや、なんだよそれ？暗殺者じゃないって、じゃあなんで来たんだよ？」
「人類最強の請負人に頼まれたというか、拉致されたというか…。僕は戦闘なんて出来ないからね。体より先に口から生まれた、とかよく言われるから、身体能力はーー人より劣る、とは言わないけれど、高いとはお世辞にも言えない。」
　それに、と言葉を続ける。
「僕は殺人なんて言うのは最低な行為だと思っているから。暗殺者なんて、そう思われるのも心外ってところだ」

こんどはしん、と静まりかえる。いまから、この隣の黄色いヤツを殺そうという彼らに正面切ってこう言い切れば、まあ静まり返るだろうなんてことは予想できたが、僕としてはこれは譲れないところだ。先に言わせてもらった方がいいだろう。別に、長居する気も、仲良くなる気も無いのだから。

「…じゃあさ、お兄さんは何が出来るわけ？教育も暗殺も出来ない、なら何が出来るの？なんのためにここに来たのさ」

「なんのために…か。それ、僕が聞きたいところなんだけどな…。強いて言うなら、さっきも言ったとおり、哀川さんに連れてこられたから、だけどーーー、何が出来るか、と言われればーーそうだね。戯言を吐くくらいかな」

「戯言？」

「そう、戯言。僕は戯言遣いだからね。口先で物事を丸め込むような、そんな事が得意なのさ」

「詐欺師みたいなことを言うんだね～」

赤髪の少年が煽るように言う。この空気の中発言できるのは、阿呆なのか空気が読めないのか、もしくはわざと読まないのかのどれかかな。恐らく最後だろうが。

「そう。間違っちゃいない…かな。よく言われるしねーー他に質問はない？」

「じ、じゃあ、何歳ですか？」

空気を取り直すためか、黒髪ロングの女の子が言う。

「歳は１９。大学生だよ…ま、あまり行けていないけれど」

「へえ、大学生なのか。どこの大学？」

「大学ーー分かるかな。京都の立命館大学なんだけれど」

「ええっと…じゃー高校！高校は!?」

分からなかったらしい。

「高校は殆ど行ってない。アメリカにいたからね」

「ってことは帰国子女？留学生みたいな？」

「いや、間違ってはいないけど、ＥＲ３プログラムに１年半ほどいたから。途中で辞めちゃったけどね」

「「ＥＲ３!!??」」
またハモった。本当に仲がいいな、このクラス。タコも含めて。
「ＥＲ３ってそれ、めちゃくちゃ頭いいんじゃん先生！」
「なんで途中で辞めちゃったの？もったいない！」
「…色々事情があってね。質問タイムはこの辺りでいい？」
「そうですね、そろそろいい時間ですし…もう授業始まっちゃいます。1時間目はイリーナ先生の時間なので、少し私と話しませんか？ヌルフフフ」
「…構いませんが」
「では皆さん、1時間目の準備をして下さい！」
際限なく質問が続きそうだったので一旦打ち切り、僕は再び職員室に連れてこられた。隣の超生物はニヤニヤ笑いを崩さず、職員室の扉を閉める。すっと椅子を差し出されたので座ると、超生物の先生は僕の前に座った。丁度面接、または面談のような隊形だ。いや、二人しかいないのに隊形というのは可笑しいのかな。他の２人ーーイエラビッチさんは授業、烏間さん（目の前の黄色に教えて貰った）は仕事で今現在居ないんだそう。文字通りの二人きりだ。
「さて、いーさん。私からも質問させて頂いてもよろしいですか？」
「…いいですけれど、そんなに僕みたいなやつの事を知りたいですか？」
「勿論です。潤さんの紹介なんだそうですね？」
「…知ってるんですか。というか、哀川さんを知っているんですか」
「はい。この間いきなり殴りかかってきましてねえ。なんとか避けられたんですが、数発くらってしまいましたーーー勿論、素手だったのでそこまでのダメージはくらいませんでしたが」
空間（からま？）さん（名前、合ってるよな？自信が無い。というか記憶が無い）が言う通りなら、こいつはマッハ２０て動けるらしいがーーー哀川さん、化け物か？なんで数発も入るんだよ。いや、この場合逆か。哀川さんで数発しか入らないなんて、こいつ、どれだけ化け物なんだ…。
……いや、やっぱり逆か？
「折角なのでパソコンで調べて見たんですが、何やら京都の殺人事件

に関わっていらっしゃったそうですね。辛い事件だったでしょう。他にもいくつかの事件に巻き込まれたことがあったようで。」
「ああ、はい。辛かったです。何せ、知り合いが死んだんですから。過去巻き込まれたどれよりも辛かったです、はい」
…白々しかっただろうか。目の前の黄色の目が心無しかジト目に見える……いや、戯言なんだけれど。
「では、そこに触れないようにします。私からも、質問をさせていただきますね？まず、何故名前を教えてくれないんですか？」
「……今までに、僕の本名を知った人が3人いますが、ーーーその誰もが生きているとは言えません」
「…！の、呪われた名前とか、そんな感じですか？」
「そういう認識で、まぁいいんじゃないですか」
「そうですか。では、次の質問を。履歴書に京都在住、と書いてありますが、こちらではどうするんですかね？」
ピラピラと履歴書を軽くふる。…いや、なんだその履歴書。物凄く綺麗な字だけど、書いた覚えないぞ。哀川さんが書いたのか？…まあ、それならそれで、そこまで知られて困ることも書いてはいないだろう。逆に安心ーー出来ないな。安心出来ない。あの人のことだから、何を書いているかわかったものじゃない。不安ぶっちぎって逆に安心出来る。悪い方面に。
「それなんですがね…。住む場所がないので困っているんですよ。いきなり拉致された身でして」
「ふむ、ならこの校舎に住んでしまっては？勿論、こちらでの住処が見つかるまでですが」
…と、どうでもいい（いや、悪いのかな？戯言だけれど）質疑応答を適当に繰り返した。およそ1時間。いい加減終わりの時間のようで、黄色は立ち上がって扉の前に歩くーー歩くというのも何だか違和感があるな。触手なのにーーーま、戯言だな。
「それでは時間もいいところですし、これで最後にしましょう。ーーーー貴方は、呪い名の方ですか？」
「……呪い名？」

呪い名ってなんだ。聞き覚えがないな。なんのことだろう…？のろいな、なら僕の名前みたいな話かとも思うが、まじないなでは検討もつかない。
「…そうですか。いえいえ、良かったですよ、分からないならそれで。ヌルフフフ、ありがとうございました、いー先生」
すいっと扉を開ける。僕は椅子に座ったままだ。
「いえ、どうせ面接がわりだったんでしょう。構いません。ところで、僕はこの後どうしたら良いんでしょう？さっきも言ったとおり、僕は何もすることがないんですよ」
「そう言えば、いー先生は授業を受け持っていませんでしたね。とはいえ、ＥＲ３プログラムに居たのであればどの教科でも受け持てるでしょう。好きな教科はありますか？」
「好きな教科ですか…英語ならそれこそ話せますけれど、見たところイェラビッチさんは英語の担当では？」
寧ろそれ以外なら驚くところだ。
「おや、英語ですか…その通り、イリーナ先生が担当でして。ああ、もう時間が無いので、放課後までに考えておいて貰えますか？烏間先生は体育の教員ですので、それ以外で」
「…分かりました。放課後までに考えておきます」
「ヌルフフフ、では」
かたん、と誰もいなくなる。勿論僕以外。仕方が無い。放課後まで、適当に時間を潰しながら考えるか。エイトクイーンはそろそろ飽きそうだし。

アンサツイエロー　戯言遣いと暗殺教室　3

山の中をフラフラしていると、いつの間にか道を外れてしまったことに気づく。いや、もちろんこれは比喩的な意味ではなく、僕が単に迷ってしまった、と言うだけなのだが。しかし困った。携帯電話の時計を見る限り、中学校における『放課後』というものは、とっくに来てしまっている。上を目指そうにも、鬱蒼としていて方向感覚が狂いに狂ってしまい上が分からなくなってしまっている。ただ、どうやら下の方まで来てしまっているようで、電波が届くくらいの高度だ。ポジティブに考えれば地面が近いので、一旦下まで降りれば道がわかるはず。ただ、ネガティブな僕に言わせれば、赴任初日（無理矢理とはいえ）から迷子になる、と言うのは大変格好悪いので、バレないように急いで戻りたい。頂上が遠い、つまり今からダッシュで逆走してもバレることは確実、という事だ。幸い電波は現在通っているので、頂上に戻るだけなら容易いのだが。

「…さて、どうしたものか」

「あっ！いたいた！いーいー先生発見！」

「でかした中村！先生、大丈夫ですか？校舎はこっちです」

金髪女子（中村さん？らしい）と黒髪男子が制服のまま軽やかに駆け下りてくる。どうやら、僕が解決策を見つけ出す前に、救出隊が来てしまったらしい。僕の近くまでよると、自分達が北方向に指を指す。

「殺せんせー探してたよー！あたし達ももーちょい話聞きたいし、着いてきてー」

「この山遭難しますいんで、なんも考えずに入ると危ないですよ」

「うん。たった今それを体験したよ」

先に言って欲しかったが、まあ、これは迂闊な行動をした僕が完全に悪い。そこで文句を言うのはお門違いという所だろう。

「おお、いー先生、心配しました！大丈夫でしたか？」

「大丈夫ですよ、心配をかけてすみません」

「謝んなくていーって！…もしもし？うん、見つけたから帰ってき

てー」
　中村さんが電話を掛ける。次から次へと電話をかけていく。まさか、全員で探したのか？…うっわ、申し訳ないを通り越して、滅茶苦茶格好悪いな、僕…。
「ん、電話したからそろそろ戻ってくると思うよー。ったく、なんか言うことあるんじゃないのー？先生ー？」
「そうだね。ありがとう、助かったよ」
「どーいたしまして。戻ってきたらみんなにも言ってあげてよね！」
　随分馴れ馴れしいな、と思ったが。中学生なんてこのくらいなのかもしれないな。いくらバイトレベルとはいえ、教師をやるというのに最初に生まれた感想が『馴れ馴れしい』というのは随分なものだろう、いくらなんでも。
　次第に、と言うより次々に、生徒が頂上の校舎に戻ってくる。僕を見て多種多様の挨拶だったり文句だったりを浴びせてくるが、1人が手を挙げて発言したことでその騒動も収まる。先程の男子だった。
「みんな、注目ー！いー先生、俺達から自己紹介をさせてください。朝は質問だけで終わっちゃったので。まず、俺は磯貝悠馬です」
「あたしは中村莉桜。よろしく！」
　次々と自己紹介をして行くが…ええと、磯貝、中村、菅谷、茅野、潮田…駄目だ、覚えられない。仕方が無いのでその都度聞くことにしよう…勿論、出来るだけ覚えるが、僕の記憶力を舐めては行けない。あってないようなものと言ってしまっていい。
「そんで、こいつが律。本体は教室にいるけど」
『自律思考固定砲台と申します。律とお呼びください』
「律……さん。ええと、よろしくお願いします…？」
『はい。こちらこそよろしくお願いします、いー先生』
　磯貝君がスマートフォンをこちらに向けると、中で女の子がお辞儀をした。…ＡＩ、だよな。物凄く高性能だ。友が見たら喜びそうだ。今度見せてやろうーーー友の事だ、もっと凄いものを作れるのかもしれないが……3時間とかで。
「で、これで自己紹介は終わりです」

「はい、殺せんせーはここでおしまーい。どっかいってー！」
「に、にゅやっ!?何でですか倉橋さん！ちょ、押さないでください、先生もって皆さんと一緒にお話したーーー」
「って事でいー先生！みんな気になってる事、聞いていい？」
「気になっていること？」
　何だろう。質問タイムは朝したはずだが、続きをやろうと言うことだろうか？
「先生って、暗殺者…だよね？どんな人？」
「やり方次第では私達も手伝えるからさ、教えて欲しいなーって」
「今殺せんせー居ないから、安心して！」
　成程、そういうことか。しかし、倒すべきターゲットが退出しようとも、僕の答えは同じ。
「僕は、暗殺者じゃない。」
「…」
　しん、と全員が見事に黙る。口を噤む。
「人を殺すなんて、最低の行為だ。…だから、僕の仕事は暗殺とか、そんなことじゃあ無い」
「…暗殺…じゃない？それって…」
　はっ、と茅野さんが口に手を当てる。僕の言わんとすることに、言おうとしているニュアンスに気がついたようだった。つまり、暗殺以外の仕事をしに来ている、と。勿論教師では無い。いや、違う訳では無いんだけれど、所謂「真の目的」と言うやつは別にある、という事だ。
「ええと、さっき名乗ってたーー戯言遣い、だったっけ、それが関係あったりする…？」
「戯言遣い、というのは、僕のスキルの名前だったり、２つ名だったりを指す訳では無い。それは僕そのものを指す名詞だから、関係があるかと聞かれれば、関係しかないと答える他にないんだけれどーーーニュアンス的には概ね正解だよ」
　すっと、中学生達に背を向け、校舎の中に這入る。後ろから待って、などと少し焦った声がするが、聞こえないふりをした。何故？今から

暗殺して見せるからーーーではなく。
「すみません。教科の件なんですが」
「おや、いー先生。生徒達とのお話はもう済んだのですか？」
「ええ。数学あたりでどうでしょう」
「数学ですか」
　黄色は意外そうにこちらに体を向ける。意外そうに、というのは声の調子だけだ。目は点だし、口は笑顔で固まっている。
「ふむ、先生、貴方は文系かと思っていました」
「はあ、そうなんですか」
「はい。先程も英語を希望していましたし、話し方からしても文系かと。国語ではなく、数学で良いんですか？」
「僕に国語は教えられませんよ。日本語ならともかく」
「どういうことでしょう」
「…戯言ですよ。気にしないでください」
「ヌルフフフ、戯言遣い…でしたね。それがあなたの戯言という事ですか」
　ニヤニヤとそういう黄色。
「分かりました。では、明日から数学を教えていただきましょう。ＥＲ３プログラムの参加者にあったことは何度かありますが、参加者の方が教鞭を振るう所を見るのは初めてなので、先生楽しみにしてます」
「そうですか。ご期待に応えられれば良いですがね」
　再びヌルフフフ、と笑い、黄色は外に出て行った。生徒に話をしに行くらしい。ふっと黄色の机の上に置いてある国語のテストを見る。
《傍線部Ｂにおける主人公の心情を述べよ》
　テストから目を背け、いつの間にか設営されていた僕の机に座る。窓の外では夕暮れの中、はしゃぎ回っている中学校と黄色の姿が見えた。それを、頬杖をついてぼんやり眺める。イエラビッチさんと烏間さんは、それぞれ２人で仕事をしているらしく居ない。
　もしもこの世界が小説だったなら、主人公は一体誰なんだろうか。あの黄色だろうか、もしくは烏間さんだろうか。あの中学生の中の誰

かだろうか。もしくは、この僕だろうか。

すっと瞼を閉じて、先程の問題を思い出す。

僕は国語だの、現代文だの、そういう類が苦手だ。漢字や語句ではなく、ああいう類の問題が。いつだって、答えは変わらない。変われない。

《傍線部Bにおける主人公の心情を述べよ》

《知るか》

アンサツイエロー　戯言遣いと暗殺教室　４

中学校の校舎（しかもおんぼろ、山頂）に泊まるといいのは初めての経験で、ワクワクしなかったといえば嘘になる。黄色と律との３人で寝た（寝た？）のだが、全く寝られなかった。ただし、これはワクワクしたからではなく、単に超生物と寝るのが初めてだったからだ。誰だって寝られないだろう。人類最強、哀川潤に膝枕をしてもらうようなものだ。巫女子ちゃん風に言うなら、『初めての修学旅行、ただし親同伴、みたいなっ！』

「おはようございます、いー先生。良い朝ですねぇ。さて、３０分後から数学の特別講座を開こうと思いますので、準備をお願いします。ヌルフフフ、初授業ですねえ」

「あー、分かりました」

『ブーーっブーーっブーーっ』

「に、にゅやっ!?」

「うわっ！…律さん？」

立ち上がろうとした瞬間、自律思考固定砲台、略して律さんがけたたましい音を鳴らし始めた。

『ひ、ひゃあっ！で、出ます！ですからそんなに鳴らさないでくださいっ！』

ぶっっと液晶に耳を塞いで焦っている律さんの姿が映し出される。なっていたのは電話のようで、ぴっと言う音とともにアラーム音は止まる。代わりに、けたたましい音量で、それこそ今鳴っていたアラーム音が小鳥のさえずりだったかのように感じるような赤色の怒号が発された。

『おぅらいーたんてめえ！何回も電話かけてんのに何で出ねえんだよ！喧嘩売ってんのか！』

「哀川さん…いえ、喧嘩なんて全然これっぽっちも売ってません、ええ」

「にゅやあっ！じ、潤さん!?す、すみませんいー先生。先生ちょっと用事を思い出したので実家に帰ります」

『あ?その声はタコじゃねーか!なら話がはえーな、今すぐいーたんを京都まで連れてこい!』
「きょ、京都!?京都の何処ですか!」
『玖渚ちん家だよ分かれよ!1日返せ、あいつやっぱ役に立たねー。あ、やっぱ辞めた。澄百合学園に連れてこい』
「澄百合学園…?男子禁制のお嬢様高校じゃないですか。どうしてそんな所に…?」
『いいかタコ、2回は言わねえぞ。今すぐ玖渚ちん家に来て〝制服〟を受け取り、それをいーたんに着せて澄百合に連れてこい。正門だぞ。間違えんな、今すぐだかんな』
「はっ、はい分かりました!!」
　黄色はそそくさと教室の窓を開けると、ばしゅん、という音と風圧を残して吹っ飛んで行った。…分からない。状況がわからない。澄百合学園?に僕が?何故?
『いーたん、居るんだろ?今からあたしの言う通りにしろ。今から澄百合学園に行って、紫木一姫っつー女子高生を救い出せ。あたしは後から行く。分かったな?』
「ちょっ…全然よく分かりませんが、哀川さん。椚ヶ丘で教師やれとか、お嬢様高校に入って女子高生を救い出せとか、一体どういう事ですか」
『詳しい話は後だっつーの。急ぎなんだよ。そいつは紫木一姫に直接説明してもらえ。いーたんの成功に一人の命が掛かってるんだからな、失敗すんなよ。あたし的にはこいつの命なんざどうでもいいが、必死こいて土下座された以上無下にすんのも可哀想だからな。いーたんが代わりに成功したら命は助けてやることにした。そしてあたしの事を苗字で呼ぶな』
　誰だよ、そいつ。恐らく僕が知らない奴だろうな。僕の知り合いに、そんな風に軽率に土下座なんてするやつは居ない。そんな事するやつは僕くらいだろう。いや、本当に僕以外は思いつかないな。というか、これ、脅しだ。知らない人の命を使って僕を脅してやがる。そんな事しなくても断れないって分かっているんだろうか?哀川さん

は。違った、潤さんは。ま、電話なら蹴られることもないので、安心だろう。
「はいっ！お待たせしました今から行きます！いー先生、舌を噛まないようにしてくださいね！」
「えっ？」
哀川さんとの会話に熱中していて気付かなかったが、いつの間にか背後に黄色が立っていた。ふわっと体が浮いたかと思えば、その大きめの服の中に入れられ。そして再びの浮遊感。今度は飛行機のような安定感のあるーーーーつまり、スピードを出して空を飛んでいるような、浮遊感。うん、飛んでいます。戯言遣い、人生初めての生身での飛行。鳥人間コンテストにでる人って、こんな気分を味わって居るのだろうか。多分こんなに速くは無い。最早地面が吹っ飛んでいくようにも感じる。
そして、またまた気がついたら、お嬢様高校、つまり澄百合学園の校門前に立たされていた。展開が飛びすぎ、と言われるかもしれないが、本当にそうなのだから仕方が無い。
「ではいー先生、私はこれで失礼します。し、仕事は果たしましたからね！いー先生がいない間はちゃんと私が代わりをしますから、安心して下さい！」
『それでは！』と言いながら、またもや空に吹っ飛んで行った。巻き起こった風で捲れ上がりそうになるスカートを抑えながら、呆然と立ち尽くし、暫くしておかしな事にやっと気がついた。…いや呆然とするのも仕方が無いだろう。人生初めての音速飛行だぞ、しかも生身で。
いつの間にか、女装させられてる。
いやいやいや、勿論そうだろう。この学校は女子高だ。男子用の制服なんざあるわけないので、『制服』と言ったら当然スカート。どうして気が付かなかったのだろう、騙された気分だ。いや、騙す騙される以前に、僕は今ここに拉致されている。勘弁してもらいたい。人類最強の赤色と最速の超生物のタッグ何で想像するのも
…仕方ない。どうやら一人の知らない人の命もかかっているらしいので、行かないという訳には行かない。…語呂が悪いな、この台詞。

戯言だけれど。

そっと門を開き、隙間から侵入する。さて、その紫木一姫ちゃんはどこに居るのだろう。取り敢えず、グラウンドを見て回ってから校舎に入るか。

アンサツイエロー　戯言遣いと暗殺教室　5

…なんということだろう。校内暴力…？いやいや、そんなものでは無いだろう。前に写真で見たことがあるが、澄百合学園はもっと、まるで新築のような綺麗な校舎だった気がするのだが、もはや見る影もない。いや、見る影もない、というのは少し言い過ぎだ。せめて、台無しだ、くらいだろう。ま、戯言だけど。

グラウンドにはなぜか人っ子一人おらず、校舎の窓ガラスは割れ、破片が周りにちらばっている。内側から割られたようだ。校舎の壁にも、所々傷が入っている。刺されたような傷から、引っ掻いたようなものまで。

…これは、中も酷そうだ。何があったのかわからないけれど、僕は今からこの校舎の中に入って、紫木一姫という女子高生を探さねばならない。一応、ポケットに写真が入れられていたので、探すことは出来る。…5年前の写真らしいが。さあ、どうやって探したものかーーーー当然だが、僕はこの学校の地図を知らない。何回まであるのかくらいなら目測で分かるが、それだけだ。

こんどは堂々と扉から中に入る。制服を着ていて、学校の敷地内にいるのだから、コソコソと動いていては逆に目立つ。まあ、少し顔を伏せる程度に留めておこう。別に感じがいるという訳でもないし。

校舎内には人は居るようだった。授業中では無いようで、同じ制服を着た女の子達がわらわらとそこらじゅうを歩いている。…何だろう、空気が張りつめているように感じるのは、気の所為だろうか。それとも、お嬢様高校というのはこんな物なんだろうか…流石にそうとは思えないけれど。もしくは校舎がボロボロなのと関係があるのか。僕の事を見ている訳では無いから、侵入に気づかれたという訳では無さそうだけど。…女子校に女装して侵入とか、字面が酷い。本当に酷い。恨むぞ、哀川さん。そして黄色の超生物。

まあ、今は誰かを恨んでも仕方が無いーーーー恨まないとやっていられないけれど、それは後でいい。まずは紫木一姫を見つけ出さないといけないのだが、勿論場所なんてわからない。生徒が沢山いるとはい

え、否、いるからこそ、僕が生徒に変装して校舎内に入ってきている以上、地図を見るだとか、生徒に場所を聞くだとか、そんな馬鹿みたいな真似はできない。僕は部外者の侵入者ですよと、言い触らしながら歩き回るのと大差がない。端からしらみつぶしに行くしかないか。

順番に、ただし怪しまれない程度に、教室の扉を開けていく。一階から二階、二階から三階、と滅茶苦茶ながらにもなんとか階を上げていくと、三階に怪しい部屋があった。普通の教室のはずなのだが、窓に布がかけられており、外から鍵がかかっている。怪しいといえばこれ以上ないくらい怪しかった。何故なら、ここ以外の部屋は、全て鍵がかかっていなかったのだ。…それはそれで、誘導されているような気がしなくも無いけれど、今は考えないことにする。後で考えよう。

「救出…だったよな」

少し考えた後、どんどんどん、と軽めに扉を叩くと、中から小さな悲鳴が聞こえた。高くて可愛いらしい悲鳴。

「ええと、一姫…ちゃん？助けに来たよ」

「…！ほんとですか？誰です？」

僕はしばし迷って、こう言った。

「哀川さんのお友達」

「…分かりました。た、助けてください！」

「うん。そっちから鍵は開けられない？」

「開けられないです」

「そっか」

まあ、当たり前だけど、壊すしかないかな。鍵なんて取りに行けないし…。ただ、あまり派手に音を立てると、誰かが気づいてしまうだろう。残念ながら、音もなく鍵を開けられるだなんていう素敵ツールは持っていない。というか、携帯電話以外、持っていない。

「一応駄目元で…一姫ちゃん、そっちから静かに鍵を壊せたりする？」

「はい、壊せるです」

「だよね…え？」

カシャン、と小さな音がして、鍵穴が…いや、鍵穴が周りともどもそっくり地面に落ちた。落ちると音が鳴るので、慌ててキャッチす

る。…断面が綺麗だ。一体、何で切ったらこうなるんだ？

そっと扉が開けられる。入ってくれ、ということだろう。急いで中に入り、扉を閉める。少し扉から距離をとると、今しがた中にいた人物、つまり、紫木一姫の姿を見た。

青みがかったショートカットの髪、黄色いリボン、低い身長。…5年前の写真じゃ分からないんじゃないかと思っていたけれど、その心配は無かった。写真そのままの…可愛い少女だった。手には大きめのナイフを持っている。これで扉を切ったんだろう。

「初めまして、紫木一姫です。姫ちゃんって読んで欲しいです」

「分かった。僕は好きに呼んでくれて構わない。哀川さんはいーたんって呼んでいるし、後はいーちゃんいっくんいー兄いーくんいー先生に戯言遣いとか、まあなんでもいいよ。姫ちゃん、いきなりで悪いけど、どうなっているのか教えて貰える？」

「はいです。姫ちゃんは、この学校に閉じ込められてるです。ついこの間、別の人が姫ちゃんを助けに来てくれたですけど、失敗して潤さんが連れて帰ったです」

「ああ…」

例の知らない人か。というか、哀川さんもいたってことか？それで失敗って…一体何をしでかしたんだ、そいつ。

「それで、姫ちゃんが捕まって、今ここに監禁されてたです」

「なるほど、何となくは分かったよ」

逆にいえば何となくしかわからなかったが。要するに、逃げようとしたら捕まって、ここに閉じ込められていた、そういう事だろう。あまり長く話していると見つかる可能性が上がる。そろそろこの教室から出るべきだろう。外に出ないことには始まらない。

「よし、じゃあ行こう。下まで案内してもらえる？」

「わかったです、ついてきてください、師匠」

「し…え？」

「潤さんのお友達なら師匠みたいなもんです」

「う、うん…？まあ、いいか…。うん、着いていくよ」

釈然としないけれど、うん、取り敢えず一階に向かおう。後で訂正

すればいい。どうやらこの学校はまるっきり敵地らしいし、急いで抜けなければ。まず外へ、話はそれからだ――いや、話自体はそこまでなんだろうけれど。言葉のあやだ。戯言だけどね。

――――――――――――――――――――――
「止まってください」
「……え?」
　二階から一階への階段を駆け下りた僕達は、あと少しで校舎から出られる、と言うその瞬間に女子高生達に包囲された。手に各々獲物を持っていて、殺気を放ちながら全員こっちを睨んでいる。その中央――つまり、僕たちの正面には、長い髪の少女がボウガンを構えて立っている。
「手を挙げて、大人しく紫木一姫を渡しなさい」
「……」
　ぱっ、と手を上げる。明白な、力関係に置ける脅迫だった。
「……君は?どうして姫ちゃんを捕まえようとするのかな」
「名乗る必要性も、答える必要性も感じませんね。分かっていますか?見れば分かることなので明言こそしませんでしたが、あえて口にするなら、あなた達は完全に包囲されています。抵抗をやめ、彼女を渡しなさい」
「それは出来ないね。なにも知らないくせにはいはいと言うことを聞く人間は、人間としての尊厳を自分から捨てに行っているとしか思えない。その癖人権だけは声高に主張するって言うんだから笑えるよな。まずは姫ちゃんを捕まえる理由を教えてよ。勿論、僕はただの馬鹿じゃないし、今の状況については理解している。とはいえ、僕だって姫ちゃんをただで渡す訳には行かない、というか渡す訳には行かないんだよ。勿論、理由も無く渡すなんて言語道断だ」
「し、師匠」
「……随分と口が上手いんですね」
「ま、それが僕の唯一の取り柄だからね」
「分かりました。最低限はお答えします。私は策士、萩原子荻。彼女

はこの学校で指名手配をされています。ついこの間も、外出禁止のここから協力者を呼んで逃げようとしています。…彼は、随分と滅茶苦茶をしてくれましたが」
「…そもそも、どうしてこんな、お嬢様高校の澄百合学園で指名手配なんて起きるのかな」
「澄百合学園…ええ。そうでしたね。…私達はそんな名称で呼んでいません。『首吊高校』と呼んでいます」
「首吊高校…」
「これ以上はお話出来ません。それで？時間稼ぎは終わりましたか？」
　後ろ手で触っていた携帯電話の送信ボタンを押す。姫ちゃんが不安そうに僕の腕を掴んだ。
「うん、終わったよ。ありがとう、子荻ちゃん」
「…随分と馴れ馴れしいですねーーーなんですか。また、死色の真紅でも呼ぶおつもりですか？」
「いいや。僕が呼んだのは赤色じゃない」
「…そうですか。まあ、何でもいいですけど、そろそろこちらもお喋りに飽きてきましたので、無理矢理でも渡して頂きますよ」
「嫌だね」
「無理矢理にでも、と言ったでしょう」
　悪いのはあなたですよ、と呟き、萩原子荻はボウガンの引き金を引く。その動作は、体は動かないというのに、何故かとてもゆっくりと見えた。ボウガンの先端をしっかりとこちらに向け直し、引き金にかけられている指に力を込める。それを見て。
（…ああ、ここで死ぬんだな）
　と。他人事のように、世界から隔離された頭で、ぼんやりと考えた。考えたと言うにはあまりに朧気に。朧気と言うにはあまりに明確に。明確と言うにはあまりに致命的に。致命的過ぎるほどに。
　バァンっ、と矢が発射され、ゆっくりとこちらへ飛んでくる。腕を掴んでいる手が、怯えたようにさらに強く僕の腕を掴む。
　あと少しで。

あと少しでーーー

死ねる？

「いいえ、いー先生。貴方はここで死ぬにはまだ早い」

ゆっくりだった僕の世界は、黄色によって、壊された。